

| | |
|----------|-----------------------------------|
| 氏名 | さだ のぶ とし ゆき 定 延 利 之 |
| 学位(専攻分野) | 博 士 (文 学) |
| 学位記番号 | 文 博 第 115 号 |
| 学位授与の日付 | 平 成 10 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当 |
| 研究科・専攻 | 文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 (言 語 学) 専 攻 |
| 学位論文題目 | 言 語 表 現 に 現 れ る ス キ ャ ニ ン グ の 研 究 |

論文調査委員 (主査) 教授 吉田和彦 教授 宮岡伯人 教授 庄垣内正弘

論 文 内 容 の 要 旨

言語研究の背景や目標はさまざまであるが、本論文が特に着目する言語研究は認知主義を背景に持ち、すべての言語の意味と形式のあり方を解明するという目標を掲げる言語研究である。本論文はこの種の言語研究においてしばしば前提とされる3つの考え、すなわち「階層的な文構造観」、「フォース・ダイナミックなコト観」、「文法記号観」に検討を加え、上記の目標からみたそれらの限界点を明らかにするとともに、それらに代わるより包括的な前提を特に人間のスキヤニング行動に着目することによって提案する。本論文は5章から構成されており、そのうち第2章から第4章は、うえの3つの考えの具体的検討にあてられており、それらの検討の理論的基盤は第1章で、結論は第5章で論じられている。

第1章でまず説明されるのは、本論文が着目する言語研究の背景である。具体的には、言語の議論に心的概念を持ち込む認知主義が説明される。さらに、それらの言語研究が前提として受容しがちな考えの特徴として、現象の主体と客体の密接な関係を否定し、現象の本質を自律的で機械論的な客体に求めようとする合理主義が説明される。次に、本論文の目標が説明される。本論文の目標とは、このような言語研究における前提をより深いレベルから掘り下げて、より包括的な前提へと作りかえることである。ここで目標とされている作業は、既存の前提の上に成り立っている多くの言語研究をすべて否定するものではなく、むしろ逆に、これまでの研究成果をよりよい形で位置づけ直そうとする建設的な作業であるということも、あわせて述べられている。さらに、この目標を達成するために本論文が採用する諸々の手法が説明される。これまでほとんど研究されていない、いわば周辺的な諸現象をことさらに取り上げるという手法もそのひとつである。そのため本論文では、筆者の母語である現代日本語を中心とした考察にとどまっておらず、他言語との全面的な対照研究には着手されていない。しかし、ここで分析対象とした現代日本語については、筆者の個人的直観にたよるのではなく、必要と思われる箇所では事例呈示やインフォーマント調査をおこなうということが述べられている。

第2章では、これまで指摘されていない「余剰的な度数表現」という現象を取り上げ、この現象を対象にしながら、階層的な文構造観という考えが検討されている。ここで余剰的な度数表現というのは、度数が合理的な計算からすればひとつ余剰に表現される現象であり、これに対して、度数が合理的な計算どおりに表現される現象は合理的な度数表現と呼ばれる。考察の過程で示されているのは、まず、余剰的な度数表現が誤用のような言語使用上の現象ではなく、合理的な度数表現と同じく文法上の現象であり、したがって文法の枠内で説明しなければならないということである。次に示されているのは、文法においてしばしば前提とされる階層的な文構造観という考えが余剰的な度数表現の存在を許容できないということ、したがって階層的な文構造観はより深く掘り下げられたより包括的な前提から、ひとつの傾向としてとらえ直される必要があるということである。階層的な文構造観の掘り下げをうまくおこなうために、認知主義的立場から、認知行動の具体的手続きに関する「無手順仮説」と「スキヤニング仮説」が提案される。無手順仮説とは、人間の2種類の事物認知方略（スキヤニングを用いる局所的な認知方略と全体的な認知方略）が本来的に順序づけられておらず、どちらが先に実行されてもよいという仮説である。スキヤニング仮説とは、スキヤニングを構成する下行行動群の具体的手順が、スキヤニング対象に応じ

て変化するという仮説である。これら2つの仮説は、余剰的な度数表現とは別の諸現象の説明にも有効であって、アドホックな仮説とは考えにくいということもあわせて示される。階層的な文構造観で説明できる合理的な度数表現と、それで説明できない余剰的な度数表現が、これらの仮説から一括して説明され、階層的な文構造観は認知行動のレベルからのひとつの強い傾向としてとらえ直される。以上の議論は、さらに、認知をめぐる反合理主義的な主張へと発展する。

第3章では、第2章につづいて、合理主義的な認知観が検討されるが、ここでは検討の対象がコト認知に限定されている。より具体的にいうと、モノ、エネルギー、空間、時間を認知的な概念としつつ、それらの因果律的展開でコトを自律的にとらえるという認知言語学でも採用されている機械論的なコトの見方（つまりフォース・ダイナミックなコト観）が、言語研究においてどこまで有効かという問題が扱われる。直接の考察対象となるのは、筆者が知るかぎり従来あまり考察されていない「使役形態素の余剰的具現」という現象である。この現象は、使役形態素が合理的な計算よりもひとつ多く具現する現象であり、これに対して使役形態素が合理的な計算どおりに具現する現象は「使役形態素の合理的具現」と呼ばれる。使役形態素の余剰的具現をめぐる議論は、余剰的な度数表現をめぐる第2章の議論とはほぼ同様の構成をとっている。すなわち、使役形態素の余剰的具現が誤用ではなく、やはり文法の枠内で説明しなければならない現象であること、使役形態素の余剰的具現の存在を許容できないフォース・ダイナミックなコト観は、より深く掘り下げられた包括的な前提のレベルから、ひとつの傾向としてとらえ直される必要があること、掘り下げには「切り出し仮説」という、やはり認知主義的な仮説が必要であることが示される。ここで切り出し仮説というのは、人間が事物認知のための最初の処理として、一連の状態連鎖のなかから必要な情報（状態）だけをあらかじめスキッピングして取り出すという仮説である。また、この仮説が使役形態素の余剰的具現とは別の諸現象の説明にも有用であることも示される。ついで、フォース・ダイナミクスで説明できる使役形態素の合理的具現とそれで説明できない使役形態素の余剰的具現が、切り出し仮説によって説明され、フォース・ダイナミクスは重要な状態の切り出しという認知行動のレベルから、やはりひとつの強い傾向としてとらえ直される。使役形態素の合理的具現のモデル（「ピリヤードボールモデル」と、使役形態素の余剰的具現のモデル（「カビ生えモデル」）は、重要な状態を切り出す基準の違いから生じる。以上の議論は、反合理主義的な認知観を、第2章とは別の角度から支持するものである。

第4章では、「文法とは、大きな言語記号が、小さな言語記号がどのように集まってできているかを説明する、記号的なものである」という認知言語学などで前提として採用されている考えが、はたして常に妥当かどうかを検討する。そのために直接の考察対象となるのは、認知言語学ではこれまで考察されていない「ミスマッチ」（「ブラケットイング・パラドクス」）という現象である。これは、語句の意味面と形式面の区分境界が一致しないという現象であり、これと反対に、意味面と形式面で区分境界が一致する現象を「マッチ」と呼ぶ。ミスマッチをめぐる議論も、第2章と第3章とはほぼ同様の構成をとっている。すなわち、ミスマッチがマッチと同様に文法の枠内で説明しなければならない現象であること、ミスマッチの存在を許容できない文法記号観はより深く掘り下げられたレベルから、ひとつの傾向としてとらえ直す必要があること、掘り下げには「参照箱仮説」というやはり認知主義的な仮説が必要であること、この仮説はミスマッチとは別の諸現象の説明にも有用であるということが示される。参照箱仮説とは、相手に伝えるべきメッセージにふさわしい言語形式を表現者が発話に先立ち心内で作出する際に、参照箱が2チャンクで更新されるスキッピングがおこなわれているとする仮説である。この仮説によれば、言語の形式面には形式面の独自性があり、言語形式は言語の意味を常に忠実に反映するわけではないことになる。マッチとミスマッチは、ともにこの参照箱仮説によって説明され、文法記号観は「意味作出」と「形式作出」という表現者の2つの心身行動のレベルから、ひとつの強い傾向として掘り下げられる。文法記号観に対する以上の議論は、さらに、言語をめぐる反合理主義的な主張へと発展する。「言語とは、意味と形式が合体した記号的なものである」というソシュール以来の言語観は、言語の主体（表現者）と客体（語や文）を切り離し、言語現象の本質を自律的な客体に求める点で、合理主義的な言語観と言えるが、この言語観ではミスマッチを起こす表現は言語研究の対象から排除されてしまうという問題が生じる。むしろ、マッチだけでなくミスマッチも無理なく研究対象として収容できる見方として、意味作出や形式作出という主体の行動自体を言語と考え、語や文は言語という行動の結果作り出されるとする言語行動観が最終的に提出される。

最後の第5章では、本論文において新しく指摘、考察された諸々の言語現象がとりまとめられている。それとともに、言語研究に関して本論文で展開された議論の意義が、言語研究の前提掘り下げおよび最終的主張という2つの面から述べられ

ている。

論文審査の結果の要旨

現代言語学は、ソシュール以来言語を自律的な体系ととらえることによって、多くのめざましい成果をあげてきた。本論文はこのような伝統的な立場とはまったく視点の異なる問題意識を提出しており、本論文のもっとも重要な意義はそこにあると考えられる。すなわち、認知主義的な立場に立つことによって、言語研究を通じて人間の心を解明しようとする新しい試みに挑んでいる。これは伝統的な言語研究の成果を決して否定するものではなく、むしろ既存の研究の前提を掘り下げて引き出された新しい知見を取り込むことによって、これまでの成果をよりよい形に位置づけ直そうという意欲的な試みである。

この目標を達成するために、論者は従来の合理主義的な言語観ではほとんど扱われることのなかった、いわば周辺的と考えられるようなさまざまな現象に注目する。このような現象は、一見不合理な言語表現のようにみえるが、誤りでもルースな言語使用でもなく、多くの話者にとってまったく自然に受け入れられるものである。本論文で示されている現象は多岐にわたるが、その多くはこれまで記述どころか指摘さえされていないものであり、本論文の随所に言語事実の発掘面での論者の非凡な能力が発揮されている。特に本論文の分析対象の中心となるのは、「余剰的な度数表現」、「使役形態素の余剰的具現」、「ミスマッチ」という3つの現象であり、それぞれ第2章、第3章、第4章で詳細に論じられている。

第2章で扱われる余剰的な度数表現とは、たとえば「あの人は奥さんが3回変わりました」という文に関して、奥さんの延べ人数は合理的には4人としか解釈できないが、多くの話者にとって「奥さんは延べ3人」という解釈が成り立つような現象である。これは決してルースな言語使用といった問題ではなく、学術的な文章のなかにも、たとえば実際に提出した理論は3つであるという認識に立ちながらも、「フロイトは3度にわたり理論を変えた」と述べているような例が数多く見受けられる。このような余剰的な度数表現が成立する理由は、要素の数をひとつひとつ認知する「スキニング認知」が、「違う」という属性が付与された要素の数をまるごと認知する「まるごと認知」に先行する心的行動によると論者は主張する。

第3章の中心的な問題である使役形態素の余剰的具現とは、たとえば「彼の一言が彼女を悲しくした」に対する「彼の一言が彼女を悲しくさせた」という文に代表されるように、使役形態素が余分に現れているようにみえる現象である。この現象を説明するために、論者は「切り出し仮説」という考えを提案する。切り出し仮説とは、人間が状態の認知を行うために、一連の状態連鎖のなかから重要な状態だけを切り出すという仮説である。使役形態素が余剰的に現れる文の述語は、「悲しくなる」のように人間の心理的プロセスや生理的プロセスを表すものが多く、このようなプロセスの認知においてそのプロセスの実現前と実現後の2つの状態が切り出される場合、使役形態素が余剰的に現れると論者は考える。

第4章では、小さな言語記号が集まって大きな言語記号ができる、という一般的な前提がはたして妥当かどうかを、ミスマッチという現象を考察対象にして検討がなされている。ミスマッチとは、論者によれば、言語記号の意味面と形式面との区分境界が一致しない現象である。たとえば、「グリコ森永事件」という語において、意味のうえでは「グリコ森永」と「事件」のあいだに切れ目があるが、形式のうえでは実際の発音において「グリコ」と「森永事件」のあいだにポーズを置く。この意味と形式の境界の不一致は、従来の言語観では説明不可能と論者は考え、やはり認知主義的な立場から「参照箱仮説」という仮説を提案する。この仮説は、言語形式を作り出す際に必要な参照箱の容量は2チャンクであり、2チャンク単位で内容が更新されるスキニングを話者は行うとする仮説である。

本論文は、400字詰め原稿用紙に換算して1300枚以上に及ぶ力作であり、豊富なデータに基づいて人間の認知行動のあり方を探ろうとした点は高く評価できる。しかしながら、問題点がないわけではない。最大の問題は、本論文が認知的な観点から提案している種々の仮説は、確かにひとつの説明モデルを構成することは間違いないが、そのモデルが本当に妥当かどうかを検証する方法が現在のところない点にある。これは、現在の認知言語学的研究が一般に非科学的であるという批判を受けていることにも相通じる問題である。しかし、この点は、先行研究が皆無といってよい言語現象に注目し、内省のきかない認知の領域へ踏み込もうとした本論文の価値を著しく損なうものではなく、むしろ論者の今後の研究の発展に期待すべきものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。なお、1998年3月2日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事からについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。